

「江戸川大学紀要」発行 30 周年によせて

「江戸川大学紀要」が創刊以来 30 年という節目を迎えることができ、大変うれしく思います。創刊時の紀要の名称は「情報と社会」であったことを、本学初代学長の諸星静次郎先生の巻頭言によりはじめて知りました。それが現在の「江戸川大学紀要」と、無機質な名称に変わったことについては、江戸川大学の学科再編の歴史が投影されているのかもしれませんが。

ところで、大学にはさまざまな顔があります。キャンパスの景観、図書館の荘厳な雰囲気などその例であります。大学の紀要も大学の顔を示すものであります。諸星先生は、江戸川大学紀要の創刊にあたって、「大学において教育と研究とは、いずれをもゆるがせにすることのできないものであります。教育と研究は、よく車の両輪にたとえられるように、どちらを欠いても大学の使命を果たすことはできません」と断言されています。まったく同感であります。諸星先生のような、学士院賞の受賞者であり、本物の学者である方の言であるだけに重みがあります。

諸星先生は「紀要に研究成果を発表することは、大学において研究と教育に従事する者にとって、義務であると同時に権利でもあります。特に若手研究者が、輝かしい未来を前にして、大いにこの権利を行使していただくならば」、この紀要も「今後ますます発展していくことと信じます」と述べておられます。江戸川大学の教員一同、この言葉を肝に銘じて、諸星先生の期待に応えていく責務があると思います。

紀要は大学の顔であるということをお先に述べましたが、他人、すなわち他大学・研究機関の研究者・学生の目に触れるわけでありますから、見てくれも大事であります。私自身、実は、恥ずかしい思いをしたことがあるのですが、1980 年代にアメリカのあるロースクールの機関誌に寄稿したとき、校正刷りの段階で、引用文献が著書なのか論文なのか、編集部よりしつこく問い合わせを受けたことがあります。それは、引用文献が著書ではなく論文の場合は題名をイタリック体で表記しなければならないという学術誌の約束事に私が無知だったためであります。学術誌においては、形式は内容に劣らず重要であります。

以上、いささか老婆心めいたことを書き連ねてしまいましたが、皆さんとともに江戸川大学紀要のさらなる充実を目指して頑張っていきたいと思っております。

2019 年 12 月 8 日

江戸川大学
学長 小口彦太